摘題和歌集

下

三村晃功編

古典文庫

三村晃功編

摘題和歌集

下

古典文庫

古典文庫第五二九冊

平成三年一月二十日印刷発行　非売品

摘題和歌集　下

編者　三村晃功

発行者　吉田幸一

印刷者　白橋印刷所

発行所　114　東京都北区西ケ原三ノ三四ノ一二　古典文庫
電話（九一〇）二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

© KOTEN BUNKO, 1991. Printed in Japan

摘題和歌集

下

宮内庁書陵部蔵

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

三　摘題和歌集　下……一
雑　部……五
四　『摘題和歌集』解説……二三七
五　初句索引……二四九

摘題和哥集

雑（部）

暁更寝覚　　定家

二七二　明やらぬとりの音ふかくをく霜に　ね覚くるしき世ゝの古こと

同　　為家

二七二　枕たにうき立ぬへきね覚かな　むかしおほゆるあかつきの夢

同　　為定

二七三　暁のとりのなく音をしるへにて　ね覚のほとそ身にならひぬる

同　　阿仏

二七四　ともの音に我涙そふあかつきを　いつよりなれしね覚なるらん

暁更冬燈　　慈鎮

二七一五　きえやらてかへにほのめくともし火に　雪夜のかねをおき出て行

海辺暁雲　定家

二七一六　あけぬとてとまりこき出る友船の　ほしのまきれに雲をわかるゝ

同　為家

二七一七　くらき夜のやみのしほ路の波間より　はなれて明る空のよこ雲

海辺暁雲　為家

二七一八　へたてつる夜のまの雲やわかるらん　あらわれそむる奥つ白波

同　阿仏

二七一九　いもかしまかた見の月の有明に　波こそかけめ雲なへたてそ

海上暁雲　頓阿

二七二〇　山のはに見ゆるはかりにあけやらて　なるとの沖にかゝるよこ雲

帰雲蔵樹　師兼

二七二一　み山へやくるれはかへるしら雲の　よそになり行嶺の松はら

行舟夜已深　　頓阿

二七二　はりまかたをのへの鐘そきこゆなる　おきこく舟にさ夜や深ぬる

扁舟暮帰　　師兼

二七三　あしの屋のなたの塩路の夕なきに　舟をし返しうたふ海士人

暁見漁舟　　慈鎮

二七四　しまかけて沖のつり舟かすむらん　あかしの浦のまつの明ほの

漁火連波　　師兼

二七五　しかのうらやあまのうき縄うちはへて　よる波かへるかゝり火のかけ

薄暮松風　　定家

二七六　うへおきし我か物からの庭のまつ　夕はかせのこゑそくるしき

同　　為家

二七七　そのことゝおもはぬくれもかなしさは　松吹わたるあらしなりけり

同　　為定

二七二八　吹風もおなしみとりの松か枝に　ゆふへはなにとさひしかるらん

同　阿仏

二七二九　いとせめて夕くれことにかなしきは　きく物からの庭の松かせ

暮山松風　慈鎮

二七三〇　いてやらぬ月に心やかよふらん　くれゆく山のみねのまつかせ

暮聞阿波　定家

二七三一　もろ人のこゝろの底もにこらしな　夕にすめる川なみのこゑ

薄暮観身　同

二七三二　きえはてんけむりの道を詠むれは　猶あともなき夕くれの空

遠山暮風　雅経

二七三三　秋のあらし梢をかけてはらふらし　夕くれみねにまよふしら雲

野亭聞鐘　慈鎮

二七三四　いほりさす野へ吹風にむら消て　おのへのかねのこゑそ物うき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

野径嵐夕　　家隆

二七三五　けふはまたまのゝかや原わけけらし　みやこにとをきあらし吹なり

告為石衣　　慈鎮

二七三六　山川のなかれ久しき谷風に　こけのころもをきぬいはそなき

幽径苔　　伏見院御製

二七三七　（続後拾遺）いかにしておもひいりけん山ふかみ　あとなき庭のこけのかよひ路

巌苔埋路　　慈鎮

二七三八　あはれにもかよふ人なき山へかな　苔にむもるゝいはのかけみち

浪洗石苔　　定家

二七三九　はや瀬川岩うつなみの白たへに　こけのみとりの道そつれなき

同　　為家

二七四〇　波あらふ磯辺の石のこけころも　ほすまそ見えぬ興つ塩風

同　　為定

二七四一　むす苔の色もかわらて打よする　岩まの波の音そくたくる

同　阿仏

二七四二　苔衣我なきぬらすたくひとや　岩こす波の間なくかくらん

浪声混雨　大納言隆国

二七四三　うち川の早瀬に浪の声すれは　ふりくる雨をしる人もなし

山中滝水　法皇御製

二七四四　分いれはふかき深山のたかねより　おちくる滝の音のさやけさ

同　定家

二七四五　雲ふかきあたりの山木つゝまれて　音ふりはつる滝のしら玉

同　為家

二七四六　山にても猶うき時やまさるらん　みたれておつる滝のしら玉

同　為定

二七四七　滝の音もまたきゝなれぬ山水に　ならはてすむは心なりけり

同

二七四八　をちこちのいもせの山木かくれすは　よしのゝ滝やあらはならまし

長河似帯　頓阿

二七四九　玉川の水のなかれの行めくり　こえぬやこかてゐてのしたおひ

河水流清　定家

二七五〇　秋の水きよ滝河の夕日かけ　木の葉もうかすくもる計に

同　為家

二七五一　底までもなかれてきよく神風や　いすゝの河の水のしら波

同　為定

二七五二　千代を経て一度すめる川水の　なかれは君そくむへかりける

同　阿仏

二七五三　あさしとは思ひなはてそ山川の　そこまてきよき心見えねは

流水浸雲根　頓阿

二七五四　かさこしや谷にゆふゐるしら雲の　中にそ落るきその山川

源光行

大行路

二七五五　新古　ますかゝみかはらぬ影もある物の　いかにうつろふ人のこゝろそ

如願法師

山路旅行

二七五六　新　かつらきやよそに思ひし嶺の雲　たもとに分る秋の夕くれ

前大納言為氏

行人過路

二七五七　続拾遺　もろ人の行きゝをいそくたよりにも　道ある御代の程そしらるゝ

大納言経信

暮望行客

二七五八　新古今　夕日さすあさちか原の旅人は　あわれいつくにやとをかるらん

前大僧正覚忠

客衣露重

二七五九　千載　旅衣あさ立小野の露しけみ　しほりもあへす忍ふもちすり

慈鎮

行客休橋

二七六〇　橋の上にまたくる人もとまりけり　もとよりやすむ友にひかれて

行路秋望　藤原清忠

二七六一　ぬれつゝも猶そ分行たひころも（続古）　朝たつ山の槇のしたつゆ

海路日暮　前関白左大臣

二七六二　ゆくすへのとまりやいつこわたの原（続古）　雲の波ちに日はくれにけり

同　慈鎮

二七六三　みなと川けふのとまりをめにかけて　夕日にいそく沖のともふね

同　頓阿

二七六四　暮にけり舟やとめましいさり火の　影みるかたはあまそ住らん

野外眺望　師兼

二七六五　さすか又かきりそみゆるむさし野や　草の原には月もいらしな

江上眺望　従二位行家

二七六六　難波（玉葉）かた風のとかなる夕なきに　けふりなひかぬ海士のもしほ火

湖上眺望　定家

二七六七　にほの海のあさな夕なになかめして　よるへなきさの名にや朽けん

海路眺望　後京極

二七六八　忘なよいまはの月をかたみにて　浪に別るゝ興のともふね

同　定家

二七六九　しるらめやたゆたふ舟の波間より　見ゆる小しまのもとの心を

同　慈鎮

二七七〇　帰るかりの霞にかける玉つさを　はまなのはしになかめつる哉

海辺眺望　源具親

二七七一　なかめよとおもはてしもやかへるらん　月まつ波のあまのつり舟（新古）

海上眺望　権大納言実家

二七七二　けふこそはみやこのかたの山の端も　見えすなるをのおきに出ぬれ（千載）

同　前参議教長

二七七三　浪の上にうかふ木の葉とみゆる哉　こきはなれ行明のそほ舟（後拾）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com